

# 前年度（2025年度）評価結果からの変化とその要因（ウルメイワシ対馬暖流系群）

## ポイント

- ・ 2025年は、1歳以上の漁獲尾数に大きな変化はみられなかった一方、0歳魚の漁獲尾数は2023年及び2024年を下回った（図1）
- ・ 2025年の漁況を評価に反映させた結果、2025年の加入量は前年度評価における予測よりも大幅に低い値となった（図2）
- ・ 過去の加入量の変動パターンから※1、2026年以降の加入量も低い水準で推移すると見込まれ、2027年の予測漁獲量は前年度評価よりも大幅に低い値となった（図2、2027年の平均漁獲量：5.2万トン → 1.9万トン※2）
- ・ 2026年以降の予測親魚量も、前年度評価よりも低い値となり、2027年には98%の確率で目標管理基準値を下回ると予測された（図2、2027年の平均親魚量：9.6万トン → 3.0万トン、目標管理基準値：5.4万トン）

※1 本系群については、ある年の加入量が高ければ（低ければ）、その翌年の加入量も高くなる（低くなる）傾向が認められる

※2 2027年のABC

## その他の留意点

- ・ 資源量指標値※3のうち、産卵量については、近年では高い値を示す直近2026年データまで含めた指標値に変更（図3）
- ・ これら資源量指標値の変更も、前年度評価結果からの変化に影響
- ・ 対馬暖流域におけるマイワシ・マサバの増加とカタクチイワシの減少に伴う漁業形態の変化により、混獲物となるウルメイワシの漁獲実態が変化している可能性があるが、このような漁業実態の変化が資源評価結果に与える影響は十分に把握できておらず、近年の資源評価における不確実性が増大している可能性がある
- ・ 特に、直近年の加入量（本年度評価では2025年の加入量）については不確実性が高いと考えられる

※3 資源量指標値：資源量や親魚量などを反映していると考えられる指標

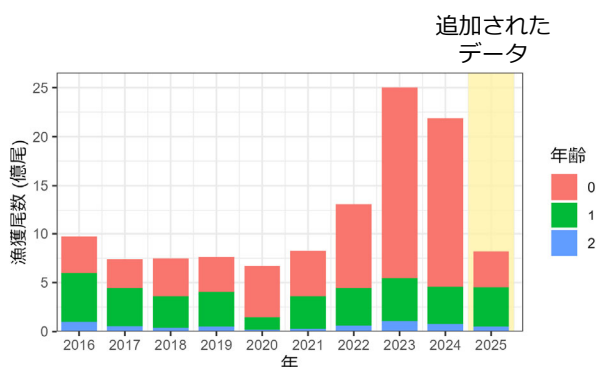


図1 年齢別漁獲尾数

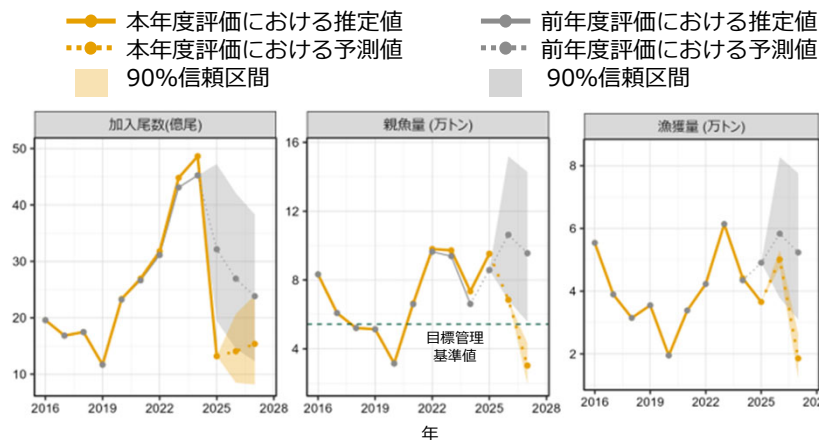


図2 本年度（2026年度）と前年度（2025年度）の評価結果

2027年のABC：本年度評価における2027年の平均漁獲量

2026年のABC：前年度評価における2026年の平均漁獲量

前年度評価における2025年の漁獲量は過去3年間（2022～2024年）の平均漁獲量、

本年度評価における2026年の漁獲量は近年の平均的な漁獲圧に基づき算出

前年度評価における2026年以降の漁獲量および本年度評価における2027年の漁獲量

は漁獲シナリオに基づき算出

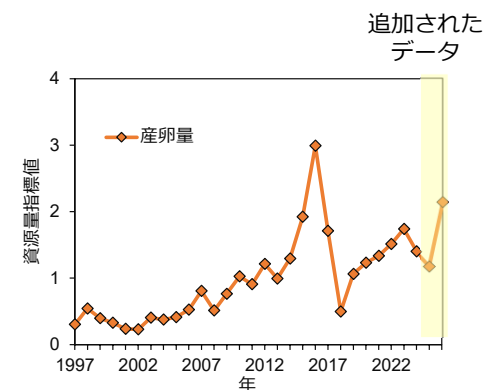


図3 産卵量

縦軸は平均が1となるように規格化した値